

**日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）  
事後評価（25年度採択課題）書面評価結果**

領域・分科（細目）	人文学・史学（考古学）		
研究交流課題名	北方圏における人類生態史総合研究拠点		
日本側拠点機関名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター		
コーディネーター （所属部局・職名・氏名）	アイヌ・先住民研究センター・教授・加藤 博文		
相手国側	国名	拠点機関名	コーディネーター （所属部局・職名・氏名）
	カナダ	アルバータ大学	Department of Anthropology、 Professor、 Andrzej WEBER
	連合王国	アバディーン大学	Department of Archaeology、 Senior Lecture、 Rick KNECHT

総合的評価（書面評価）

評 価
<p>A 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。</p> <p><b>B</b> 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。</p> <p>C ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。</p> <p>D 成果が十分にあるとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。</p>
コメント
<p>北海道大学アイヌ・先住民研究センターは事業期間内においてほぼ当初の目的を達成したものと考える。</p> <p>年に4件の国内外でのセミナーの開催と礼文島のフィールドスクールの運営は実績に数えられる。しかし、これらは内外の拠点機関の研究者がそれぞれ行ってきた研究の成果の発表を中心としたもので、この事業による共同研究を行いその成果を発表する段階には至らなかったように見える。</p> <p>ただ、北海道大学を核とした国内3大学の共同、カナダ・UK 両国研究機関との連携、そして欧米各国・ロシアの研究組織・研究者も参画する研究交流を積み重ね、研究交流拠点形成を実現した。また、礼文島のフィールドスクールが定着したことは大きな成果であり、今後はフィールドスクール参加をきっかけにした海外の学生の修士・博士論文が出てくることを期待したい。</p> <p>業績に現れた主たる研究素材や教育の舞台は、考古学的資料や発掘現場であり、これらの拡大と充実を図ることが戦略的に有効と考える。これが体制的に無理であれば、今後は協力機関や研究協力者との連携をより強く維持されることを望む。このような魅力ある研究と教育の場を提供することで、諸外国からの学生や研究者が集う場となり、ここで築いた調査研究法や教育法のハウツーが今後展開するであろう。</p> <p>今後も、本事業の趣旨が持続・発展するための努力とその実現をおおいに期待したい。</p>

## 1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の育成」「国際研究交流拠点の構築」の観点から成果があったか。</li> <li>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されたか。</li> <li>・ 本事業により得られた成果の社会への還元があったか。</li> <li>・ 当初予期していなかった活動成果があったか。</li> </ul>
-----	--

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果があった。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果があった。 <input type="checkbox"/> ある程度成果があった。 <input type="checkbox"/> 成果があったとは言えない。
コ メ ン ト
<p>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の育成」「国際研究交流拠点の構築」の観点から成果があったか。</p> <p>2つの共同研究「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」・「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」では、先行研究をはるかに凌ぐ広さの学問領域を横断するプロジェクトを北半球諸国の研究者・組織間で運営し、北方圏の人類史の特質を解明する取組みを重ね、従来十分とは言い難いその海洋適応の重要性を明らかにし、議論の難しい「先住性」について諸国研究者間で比較研究を重ねた。</p> <p>若手研究者育成の点では、若手研究者を特任助教として雇用したり、大学院生の交流指導を行ったりという試みが始まっていることは特に重要な成果である。また、若手研究者育成に海外の若手研究者をリーダーとした先史民考古学研究コンソーシアムを礼文島国際ワールドスクールの一環として実施するなど、多角的な育成事業を展開しており、評価できる。</p> <p>国際研究交流拠点形成の点では、上記各種事業の運営と併行して、国内3大学の連携を基礎としてカナダと英国・スウェーデン等の諸国研究機関との共同事業を重ねており、さらにロシアとの研究交流も実現している。以上の諸点から、先端的研究の国際的拠点形成が順調に進んでいると評価する。</p> <p>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されたか。</p> <p>先住民研究の重要概念であり、しかし諸国の近現代問題ゆえに議論を要する「先住性」の理解・認識について、国際的に議論を重ねたことは、今後を展望する際にきわめて重要な成果であろう。</p> <p>しかし、「北方圏における人類生態史」というテーマに直接関連する内容での査読付き国際誌への論文発表数は、期待されるより少ないと言わざるを得ない。ただ、毎年4件開催された国際セミナーや学会では多数の口頭発表がなされており、今後論文の形で発表されることが期待できる。</p>

なお、オホーツク文化とバイキング集団の比較研究など、研究交流を通じて興味ある研究テーマの発掘に成功している点は指摘できる。また、アイヌ民族物質文化のデジタル化と公開のための研究、先史民適応の新たな理論構築のための糸口をつかむなど成果が挙げられている。

反面、論文・国際学会発表・国内学会発表として提示された論文や発表の中には文献名が確認できないもの、査読の有無の正確性、文献の重複（区別がつかないもの）などが含まれており、報告の精度が求められる。業績の中には自然科学分析系のものが多数含まれるが、研究テーマ・対象地域・時代との整合性が不明確なものも含まれていた。

- ・本事業により得られた成果の社会への還元があったか。

研究交流・研究成果を、研究者間で蓄積するだけでなく、一般社会人あるいは高校生向けに毎年連続講座を開催している。現在世界各地で先住民をめぐる諸課題が認識され、わが国においても先住民族政策が大きく動き出している状況にある中、公開講座の開催や市民向けシンポジウムの開催など社会貢献にも積極的である。ただし、研究成果を啓蒙書などで広く公開することも必要であろう。

なお、礼文島の小・中・高校生を対象としたセミナーや、先住民であるアイヌの人々に、「自分たちの文化遺産」との意識を持ってもらうための出張講義等の活動にも、もっと力点を置いてよかったのではないか。

- ・当初予期していなかった活動成果があったか。

ロシアとの大学間交流形成事業プログラムの採択などにより、ロシア学術機関との交流や学術研究・調査が開始され、新たな拠点形成が進行したことは大きな成果である。

## 2. 研究交流活動の実施状況

観 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施したか。</li> <li>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であったか。</li> <li>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されたか。</li> <li>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されていたか。</li> <li>・ 中間評価における指摘事項等について適切に対応されたか。</li> </ul>
-----	--

評 価	<p><input type="checkbox"/> 想定以上に効果的に実施された。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施された。</p> <p><input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施された。</p> <p><input type="checkbox"/> 効果的に実施されたとは言えない。</p>
コメント	<p>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施したか。</p> <p>カナダブリティッシュ・コロンビア大学との共同研究教育プログラムを実行に移したり、オックスフォード大学との間でセミナーを実施したり、今後の取組みの持続を可能とする条件が整えられており、所与の目的はおおむね達成している。</p> <p>しかし活動がセミナーの実施にやや偏っていた感があり、フィールドワークで得た資料を活用し研究テーマを設定し国際共同研究を始めるまでに至らなかった。</p> <p>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であったか。</p> <p>国内における琉球大学および東京大学との協力体制は一部に若手研究受入、共同セミナーの開催、分析科学分野での協力など、それぞれの特徴を生かした実施・協力体制を整えている。</p> <p>また、国内拠点機関が用意したフィールドスクールが、学生の体験交流の場を提供したことは評価できる。</p> <p>今後は、拠点機関の研究者が、これまでのそれぞれのフィールドでの研究プロジェクトを継続しつつ、アイヌ・先住民センターを拠点とし「北方圏における人類生態史」をキーワードにした統合的な共同研究が発展することが理想的な方向であろう。5年間を終わった時点では、相手国研究者との共著または共同発表は少なく、共同研究のテーマを発案する方向に進んでいるかどうかかわからない。セミナーでそれぞれの研究成果についての情報交換は十分になされたはずなので、今後の共同研究のための枠組みやアイデアが生まれるところまで至るかどうかは継続の鍵である。</p>

- ・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されたか。

経費の執行は適切である。セミナー開催の旅費がほとんどを占めており、具体的な共同研究の推進という部分への投資は足りなかったように思われる。

- ・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されていたか。

カナダ・英国2か国のマッチングファンドが確保されて研究交流が実行されており、英国の額がやや限定的である点が気がりではあるものの、全体としては適正であると評価する。

- ・ 中間評価における指摘事項等について適切に対応されたか。

おおむね、適切に対応されていると判断する。

中間評価で指摘された、若手研究者の育成に関しては、大学の外国人招聘教員枠や全学教員運用枠を活用し、特任教授および准教授や助教を雇用するよう努力がみられる。さらには、論文作成のためにセミナーなどでレクチャーを担当させるなど、教育に十分に配慮している。研究者育成には時間がかかり、研究期間内に論文発表や学会発表数に直接的に結びついてはいるが、姿勢と配慮は十分に感じられる。

北海道大学における北方圏の国際研究拠点形成という点は、5年間の交流により研究者ネットワークの基礎は形成されたとみられる。今後の若手育成を含む共同研究の継続発展と大学間交流協定による国際的な教育プログラムの整備に期待したい。

### 3. 今後の研究交流活動計画

観 点	・事業終了後も世界的水準の国際研究交流拠点として、継続的な研究交流活動の実施が期待できるか。
-----	--

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果が期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> ある程度成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 成果が期待できない。
コ メ ン ト
・事業終了後も世界的水準の国際研究交流拠点として、継続的な研究交流活動の実施が期待できるか。  5か年にわたる研究拠点形成事業への取り組みは、北海道大学を核として、東京大学・琉球大学、さらにカナダ：アルバータ大学、英国：アバディーン大学と連携して共同研究交流・セミナー等の実施を行い、さらにそれ以外の諸国を含めた多数の若手研究者が参加する育成セミナーを毎年開催しており、世界的水準の国際研究交流拠点形成が実現し、すでに次世代を見越した持続的研究交流活動が動き出していることがよく分かる。 今後は、理系の分析を行える国内の各機関や研究者たちとの連携を今後も維持し、大学院生や若手研究者の長期の派遣と受け入れを含む、研究の推進に重点を移す段階になるだろう。礼文島の遺跡発掘資料をはじめ、北大の資料を用いた共同研究の推進あるいは海外拠点機関のプロジェクトによる研究への若手の参画などによって、学位論文や共著論文による成果を積み上げ、大学として海外の拠点機関との単位互換や共同指導の枠組みを整えつつ、センター機能の中に協力機関や協力研究者のような理化学的分析を加えていくことを期待する。